未定、ていうか決めてない。

秋島なぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未定、ていうか決めてない。

【Ｎコード】
Ｎ９９３６Ｗ

【作者名】
秋島なぎ

【あらすじ】
うーん、恋愛もの？　青春もの？　音楽もの？　わからんね。

1章

俺は十七歳で、そのとき学校の屋上でマーティンD－28を弾いていた。親父のお下がりであるそのアコースティック・ギターの弦を中指でちょんとはじくと、心地良い音が空気を振るわせた。はじめからそこにあったかのような音。それでいて、この陰鬱な曇り空をぶっ飛ばしてくれそうなくらいに、力強いサウンドだ。

四月もようやく後半に差しかかった、ある日の放課後。高校生活にも慣れはじめた新入生たちが、新たに出来た仲間と共に無駄にでかい校門をくぐる。そんな光景がここからは見える。そう。そんな甘酸っぱい光景に見えなくもない。

というのも、俺の通う桜花高校は、都内の出身ならば誰もが知っている有名な私立高校で、付属の桜花中学とのエスカレーター式の学校だ。

つまりほとんどが顔なじみ。ちなみに俺は高校からの入学。俺みたいに高校から入ってくるやつは、まぁほとんどいないらしい。年に3人入れば多い方で、それも大体がコネだ。

――入学式の話をしよう。

それはまるで、砂漠の真ん中に裸で放り出され、どう猛な虫たちとダンスするような、なんとも微妙な一日だった。

見事に澄んだ青空と、桜が吹雪のように舞い散る景色。真新しい高校の制服に身を包んだ新入生と、小綺麗で現代風のアートのような校舎は、まるでスクリーンの一場面のように輝いて見えた。

俺は生まれたての空気を吸ったような晴れやかな気持ちで、入学式の舞台である体育館に足を踏み入れ、用意されていた自分の席にどっかり腰を降ろした。そして違和感に気付いた。

周りの目という目が、「この人誰？」みたいな視線を、ところ構わず投げつけていたのだ。

話に聞いてはいたのだけど、ここまでとは思っていなかった。

とりあえず、そこでギャグの一つでもかますことが出来たのなら、あるいは俺の高校生活は、今よりずっと良いものになっていたのかも知れない。
だけどそれはもしもの話であり、これから語る物語とは、ほんの少しも関係ない。
定型化された入学式もようやく終わって、教室に通される。

【訂正予定ここから】

しまいには自己紹介の時間を「みんな知ってるだろうから、なしでいいよな」と、教師の一言でかたづけられた。
そして誰かが「先生。この人知りませ～ん」とか言ったはずだ。多分、委員長の黒澤だろう。
それで俺一人教壇の横に立ち、黒板にでかでかと自分の名前を書いての自己紹介。なんだろうね、この理不尽。
新入生にして転校生。そんな感じだ。

【ここあたりまで】

それでもともと不良っぽいとかチャラそうとか、そんな風な悪いイメージを植え付ける容姿をしているせいか、（一応の自覚はある）あんまし友達は出来なかった。俺にしても積極的に友達を作ろうとか、青春の熱い汗を一緒に流そう、とかそんなもんに対して興味とか関心とかあんまりなかったから、別に構いやしなかったのだけど、やっぱり寂しくはある。
それから一年が立たった。
俺は相変わらず孤立していると思う。
もちろん最低限の会話くらいはするし、二人組を作れとと言われても、余りはしないと思う。けれども、心から信頼できる友達とか、

一緒に遊びたいと思える魅力的なやつは、今のところ俺の前には現れてくれない。あるいは、俺が誰とも関わろうとしないせいかもしれない。
だから、放課後は屋上でギターを弾いたり、心地良い風に身体を預け、ウォークマンで音楽聴いたりして過ごしている。

南校舎の屋上には、大きな給水塔がある。
風の通り道にもなっているその給水塔脇に隠れて、校庭を見下しながらギターを弾くのが、俺の日課だ。
ふと、ビートルズの『イエスタディ』を弾いてみたくなった。夕暮れ時には、ぴったりの曲だ。
……そのはずなんだけど。今日の気候的にただの悲しい歌になっているような気がして、一番だけ弾いて、それでやめた。
「なんか、憂鬱だなぁ」
床に寝転がってみる。ひんやりした。リゾートビーチの砂浜のような、軽い感じの綺麗な白が、視界いっぱいに広がって見えた。
顔だけ横を向く。
なにかが、いつもと違った。
給水塔の脇の、更に奥。頑丈そうな茶色の段ボールと、パンを乗せるような白い小皿があり、
そこに……、

――猫がいた。

黄色と淡灰色を混ぜ合わせたカフェオレみたいな色に、漆のような黒の混じった毛並みをしている。小太り気味の縞猫。今にも喋りだしそうな感じに、つるんとしたまん丸の瞳を、俺に向けている。
その猫は「にゃ～」とふてぶてしく鳴くと、ぺたりと床に座り込んだ。随分と人になれてるみたいだ。

首輪もあった。茶色い無地の首輪で、革製だと思う。左足には――今にもはだけそうなそうな感じだが――包帯が巻いてある。
「怪我、してるのか？」
猫は答えない。返事のかわりか、ピンと生えたひげのあたりを、前足でくしくし撫ではじめた。
「誰かがかくまったのかな？」
まぁそれが誰かはわからないけど、ともかくその誰かが怪我していたコイツを見つけて、それで放っておけなくなった、といったところだろうか。昨日は、雨だったし。
包帯の具合から察するに、世話を焼いた人物はまだ屋上には来ていないようだった。
今日はもう帰ろう、と俺は思った。なんだか、めんどくさいことになりそうだったから。
胸ポケットから生徒手帳を取り出して開く。

【訂正予定ここから】

――桜花学園。
規則では学校で猫を飼うなんてことは、もちろん許されていない。それにここにいたら、いずれそのお節介さんと邂逅することになる。
人と話すことが嫌いなわけじゃない。ただ、あんまり積極的ではないだけだ。そういうやつは、結構いると思う。俺の場合、それが骨の髄まできっちりと染みこんでいるだけだ。

【ここあたりまで】

ギターを黒いハードケースに戻し、立ち上がってそれを背負う。
猫は小首ををかしげて、俺を一瞥した。そうしてまた、何事もなかったかのように顔を洗い始めた。

「明日にはいなくなっといてくれよな。居場所を取られるのは、たまったもんじゃないからな」
空を見あげると、ねずみ色の怪しい雲が一面を覆い尽くしていた。一度、大きく風が吹いた。右手で舞い上がる前髪を押さえる。
屋上の扉が開いた。
風が静まる中、一人の女の子が現れた。
肩胛骨あたりまでさらっと伸びた黒い髪。たれ目がちでくっると した、まるで子犬のような可愛らしい瞳。野いちごのように赤い唇。紫の校章。二年生だった。
たしか、名前は――。
「……一ノ瀬さん？」
「えっ、あ、あれ？　朝倉くん？　な、なな、なんでここに！？」
一ノ瀬さんは振り向いて俺の姿を認めると、あわてたように後ずさった。
猫を屋上に運んできたのは、もしかしてこの娘なのかな？　確かに、それなら納得だ。
「あー俺、放課後はここでギター弾いてるんだ」
「そ、そうだったんだ……。知らなかった。ギター、弾けるんだね」
絞り出すように、一ノ瀬さんは言葉を発する。
「まぁ弾けるだけだけどね。上手くはないよ。それじゃ、俺はこれで」
「う、うん」
一ノ瀬さんの脇を通り抜け、俺は屋上の扉のドアノブを握る。
「あ、朝倉くんさ。あの、ここにね。なにか、いなかった？」
「なにかって？」
ドアノブから手を離し、振り返る。
「えと……その、知らないのなら、構わないの。ごめんね、引き留めちゃって」
申し訳なさそうに顔を俯かせる。きまりが悪そうに、お腹の前あたりで手の指先をあわせたりしている。

俺はその姿を見て、喉に何か引っかかったようなむずがゆさを覚えた。
はっきりさせておくべきなのかもしれないな、と思った。あるいは、俺は知っているぞ、ということを誇示したかったのかもしれない。
「猫のこと？」一ノ瀬さんはびっくりしたように顔をあげた。「それなら誰にも言わないから、安心して」
くるっとした可愛らしい瞳が、大きく見開かれた。一ノ瀬さん頬をさっと赤く染めて、顔を逸らした。俺も少し恥ずかしくなった。
「そ、そっか」
「うん。それじゃ」
そう言って、俺はまたドアノブを握った。明日までに、あのデブ猫がいなくなっていることを願いながら。
「あ、まって！」
今度は首だけ回して、一ノ瀬さんを視界に入れる。
「なに？」
「あの猫。うん。わたしが連れてきたんだけど。わたしの家、猫アレルギーの人がいて、だから、もしよかったら、少しの間でいいから、朝倉くんのお家で飼えたりしないかな？」
「う～ん、難しいかな。俺の妹もアレルギーなんだ。猫は好きなんだけどね」
そういえばあの猫、品の良さそうな首輪をしていたな。もしかして、誰かから預かっているのかな？　少しの間っていってたし。
「あの猫って、誰かから預かったの？」
「あ、いや。昨日、裏門のほうでたまたま見つけたの。怪我してるみたいだったから、少し治療して、だけど家で飼うことが出来ないから、とりあえずここにいてもらったの」
「ふぅん」
ということは拾い猫で、飼い主はわからないということか。預かっているだけだったら、俺の憂いは、時が経てば消えてくれるわけ

だったんだけど。
「あの、やっぱり迷惑……だったかな？」
「どういうこと？」
「だって、いつもここにいるのなら、先生に見つかったとき、やっぱり朝倉くんが疑われたりするよね。だから……」
そりゃあそうなんだけど、そこまで心配することなんてないのに。屋上が誰かの専用ってわけじゃないし。
いつの間にか、さっきの猫が姿を現わしていた。猫は左足を引きづりながら、やっとの事で一ノ瀬さんの隣まで来た。
「あっ！」
寄りかかられて、一ノ瀬さんが猫に気付く。さっと屈んで、それから、右手で猫を優しく撫でる。猫のほうも、気持ちよさそうに一鳴きする。
「猫には慣れてるの？」
「うん。昔、一匹だけ飼ってたの。今はちょっと、事情があってダメなんだけど」
「そうなんだ」
猫は俺といたときと同様に、ふてぶてしく床に座り込む。なんとなく、一ノ瀬さんが王様の身の回りの世話をする家来のように見えた。一ノ瀬みなぎはそういう娘だ。
今は違うクラスだけど、一年の時、俺と一ノ瀬さんは同じクラスだった。たいして会話した覚えはないし、お互い積極的に話すほうでは無かったけど、一年間も同じ教室にいて、同じ授業を受けて、たまにあるイベント事をこなしてれば、表面上の人となりくらいは見えてくるものだ。
一ノ瀬みなぎとは、けして表には出ないけど、人が困っているときはどこからか手をさしのべて助けてくれるような、そんな、どうしようもないお人好しだ。それが一年間の共同生活で得た、俺の一ノ瀬みなぎのイメージ。
「あのね」猫に指をしゃぶらせながら、一ノ瀬さんは言う。「もし、

もしよかったら、一緒に猫の飼い主、探してくれないかな？」
「飼い主？　里親じゃなくて？」
「うん。ルークは捨て猫じゃないと思うの。あっ、ルークっていうのは、この猫の名前なの。首輪に掘ってあったんだけどね。ほら、こんなに立派な首輪してるのに、捨て猫のはずないよ」
それは確かに、そうかもしれない。
「それに、ルークがここにいるのも、迷惑だよね？」
「まぁ、そうだね」
「それなら――」

【訂正予定ここから】

【ここのあたり？】
「……いいよ。それくらいなら」
胸をなにかで突き刺されているような気がして、俺は一ノ瀬さんを傷つけないように、そう言った。
まぁ、特にやるべきことなんて他にないし、なによりこの場所を取り戻せるのなら、協力するのも悪くはない。
すると一ノ瀬さんは、はっとしたように顔を上げる。
「ほんとに！？　あの、全然、断ってくれてもいいんだよ？」
そうは言っているものの、一ノ瀬さんの瞳は夜の星空のようにきらきらとしていて、おもちゃを買ってもらう前の子供みたいだ。
「ほんとだよ。俺、部活もないし。暇なんだよね」
本当のことなんだけど、言ってて悲しくなってきた。
ほんとに高校生なんだろうか。
「そ、そっかぁ。よかった。絶対断られると思った」
一ノ瀬さんは不安から解放されたように静かに息をつき、がっくりと肩を落とす。
俺は「どうして？」と訊ねた。

「だって、朝倉くんって俺に近づくんじゃね～、みたいなオーラを纏ってるから、だから、少し不安だったんだよ」
「そうかな？　あんまり意識したことないんだけど」
左手で頬の上の方を軽く掻きながら、俺は苦笑した。
「それなら絶対意識するべきだよ。朝倉くんは良くても、他に朝倉くんとお話ししたい子とかいっぱいいると思うから」
俺とお話したいとか、そんなことあるんだろうか？　俺みたいなやつと話しても、たいして面白くも何ともないだろうに。
「まぁ、気をつけるよ」
「うん。よろしい」
一ノ瀬さんはにっこりと笑った。それは冬の日の缶コーヒーのように、あたたかな笑顔だった。
俺は恥ずかしくなって、ぷいっと視線を逸らす。雲の切れ目から柔らかな光が差し始めた。
「あ、それじゃ、飼い主捜しのことなんだけど……」
「それさ、明日からでも良いかな？　今日はちょっと、予定があるんだ」
「予定？」一ノ瀬さんは不安そうに、俺の目をのぞき込んでくる。
「……彼女とデート？」
「違うよ。アルバイトだよ」笑いながら俺は答える。
ていうか、彼女なんていないし。
「そ、そっか。うん。それなら仕方ないよね」
一ノ瀬さんは一人でうんうん唸って、それから納得したような表情をする。
「それじゃ、明日の放課後。この屋上で待ってるから」
「わかった。それじゃ」
俺はドアノブを回して、屋上を出た。扉が閉まる前に、一度屋上のほうを横目に覗いた。一ノ瀬さんとばったり目があった。彼女はくるっとした瞳を細めて、「ばいばい」と小さく手を振った。

2章

学校を出てしばらく駅のほうへ歩いた。大通りに出て、そこをずっと直進。

大通りでは制服姿の学生とよくすれ違った。もともとこのあたりは学校が多くて、教の都だの言われている。

明らかに釣り合っていないカップルがいちゃいちゃとクレープを突きあっていたり、数人のグループで大声をあげながら帰ってる奴ら。そのグループの大概の奴は、俺たちは無敵だぜ、といった感じに振る舞っているけど、何人かは恥ずかしそう後ろに隠れながら歩いている。そんなふうにこそこそするんなら、つき合わなきゃいいのに、と思う。

俺は立ち止まって、鞄から音楽プレイヤーを取り出し、カナル型のイヤホンで耳を塞いだ。オアシスの『ドント・ゴー・アウェイ』が流れてくる。ノエル・キャラガーのヴォーカルに耳を傾けながら、俺はまた歩き出した。ふと空を見あげると、雲は屋上にいたときよりも明るい色をしていた。

そのまましばらく歩いて、駅の横の橋を渡り、サンクスの前で右折。そのままずっと道なりに行って、駅前の喧騒が届かなくなったあたりで左手に入る。俺のバイト先であるライブハウスは、そこの地下にある。

ここのライブハウスは、中学の先輩の親父さんが数年前に趣味ではじめたもので、公称二百人入りの広さだ。大きくもなく、けれど小さくもない。

「ちょっと遅いんじゃない？」

楽屋の堅いソファーに腰掛けて、途中のコンビニで買った総菜パ

ンを囓っていると、羽田美里が不機嫌そうに声をあげた。
「余裕はあるだろ？　それに今日はおっさんたちじゃん」
「そうだけどさ。時間は守ってもらわないと。こっちもお金払ってるんだし」
「まぁ、気をつけるよ。今日は、ちょっと、悪かった」
「わかってるんなら、まぁ、構わないけど」
シャギーの入ったショートカットの茶色い髪を弄りながら、美里はソファーに腰を降ろす。
ライブハウス『』の楽屋には、俺たち以外に人の姿はない。そのかわり、ゴミ集積場のように高々と積まれた荷物が、そこかしこに散乱している。ライブ用の派手な衣装であったり、各の楽器であったり、よくあるパイプ椅子であったり。
俺のバイトというのは、ざっくり言ってしまうと、ライブのヘルプだ。ライブを演りたいけど人数が足りなかったり、メンバーの一人が急用で出られなかったりするたとき、そんな時に俺が呼ばれるわけだ。
「そうだ。俺のマーティンなんだけどさ、もう弦に錆がきてんだ。新しいのに替えてくれよ」
担いできたハードケースからギターを取り出して、美里に渡す。美里は受け取ると、そのまま胸を乗っけるように構えて、適当なコードを指で弾いた。
「うん、たしかにダメそう。それじゃ、これが今日のバイト代ね。ジョン・ピアーズでいいよね」美里はそう言って、ギターの6弦を、埃でもとるように指でなぞりはじめる。「あ、それと、今日はなに使う？　父さんたちはストーンズ演るって言ってたけど」
「それじゃ、5弦オープンのテレキャスター」
「面倒なチューニングやらせるな。普通のもってくるよ」
美里は呆れたように肩を落とす。
5弦オープンとは、通常6弦あるギターの、一番上の弦を本体から外したチューニング方法だ。ローリング・ストーンズのギタリス

トであるキース・リチャーズが、この5弦オープンで有名なギタリストだ。
美里は俺のギターをケースに戻して、「んしょ」と言って肩に担ぐ。楽屋の扉を開け、足取りでお店のほうに続く通路へ消えていく。
美里が消えていった店側、すなわちライブハウスの上の建屋は、いわゆる普通の楽器屋になっている。羽田楽器店だ。
美里はそこの店主である、熊五郎みたいなおっさんの娘だ。つまりは中学の先輩で、歳は俺よりも一つ上なんだけど、お互いそんなことは気にしちゃいない。

しばらくの間なにをするでもなく、天井にぶら下がってくるくる回っている、三枚羽のシーリング・ファンをぼんやり見つめていた。
そういえば、明日からの急なヘルプは断らないといけないな。猫の飼い主捜しがいつまでかかるかはわからないけど、それが礼儀ってもんだろう。
「よぉ、司。なんだ来てたのか」
美里とおそろいのエプロンを着た熊五郎のおっさんが、楽屋の扉を開けて、そこに手をついていた。
きらりと光る後頭部に、毛虫がひっついたような眉毛と口ひげ。一体どうすればこんな親父から美里が出来るのか、考えれば考えるほどに不思議だ。
「来てなかったら困るでしょう？」
「まぁ、そうだな。ギター弾けるやついないしな」
おっさんは巨体をのっそり動かしてソファーに腰を降ろし、エプロンのポケットからラッキー・ストライクを取り出すと、１００円ライターで火をつけた。
「ふぅ～」
口から旨そうに煙を吐き出す。
「あれ？　この前やめるって言ってませんでした？」

「あぁ？　そうだっけ。いつ言った？」
「一週間前」
「あぁ、あぁ。それ、二回前のやめる宣言だな」おっさんはそう言って、ごつい灰皿に煙草の灰を落とす。「煙草はやめられねぇーよ。美里の前で吸うとすげーうるさいから、一応隠れて吸ってるんだけどな」
「……はぁ、そうですか。そんなことだから、１５分くらい叩いただけで息切れ起こすんですよ」
「うるせー」と言って、おっさんは笑った。
「まぁ、１時間も演奏する訳じゃないから、いいんですけどね」
俺は鞄から携帯電話を取り出して、時間を確認した。１８時３０分だった。
しばらくすると、おっさんは短くなった煙草を灰皿にぎゅっと押しつけて、火を消した。吸い殻から細い煙が立ち登り、砂糖のようにそっと闇に溶けた。
「そういえば、今日はストーンズでいいんですよね？」
「ああ。リズムは俺がとるから、お前はテキトーに弾いててよ」
俺は肯いた。おっさんは二本目のラッキー・ストライクを口にくわえる。楽屋の扉が、勢いよく開いた。
「つかさ～、テレキャスター持ってきたわよ。あと１０分で出番だから、ちゃんと準備しておいてよっっ！」
美里だった。茶色いギターを抱えている。
おっさんは水をぶっかけられたように目を見開き、くわえていた煙草を急いでポケットにしまった。
「あぁーっ！　おとーさんなに吸ってるの！　この前やめるって言ったばっかりじゃんっっ！」
「いや、違う。まて、これには理由があってな。。司のやつが煙草吸ってみたいって言うもんだから、仕方なーくだな」
「なにが仕方なーくよ！　持ってたことは事実でしょっっ！　はぁ、あんまり景気よくないっていうのに、このダメ親父は」

美里は呆れたように、右手でこめかみあたりを押さえた。それから、俺のほうにギロリと視線を移す。
「それで、司が吸ってみたいって言ったの？」
「ちげーよ。なんで俺が吸わなきゃいけないのさ。煙草は税金払いたいやつと、病気になりたいやつだけ吸ってればいいと思ってるよ」
俺がそう答えると、なぜだかおっさんが突っかかってきた。
「バカ！　煙草っていうのは病気にも効果あるんだぞ。この前ラジオで聞いた話なんだが、ほら、病は気からっていうだろ？　あれと同じで、旨い煙草吸い続けて気分上げてると、なんと不治の病が治ったそうなんだよ。だから俺はな、これからも煙草を吸い続けることにしたんだよ」
それはいったいどこの世界のラジオなんだろうか、と俺は思った。煙草は体に良いなんてアホみたいなことを大まじめに語れるのは、少なくともこの世界の放送ではないだろう。たぶん宇宙電波速報とか地底マグマ通信みたいな感じの、得体の知れないラジオ番組だ。
というか、言った本人たちは冗談のつもりだったろうに、この熊親父は……。
「もう、どうでもいいわよ。どうせなに言っても聞かないんだから」
美里は汚物を見るような視線で自分の父親を射抜くと、抱えていたギターを俺に渡した。
受け取ったギターは5弦オープンのテレキャスターだった。
「キースと同じオープンGチューニングにしておいたから、間違わないでよっ！」
美里はリスみたいに頬を膨らませて、ぷいっとそっぽを向いた。
「えっ、マジで持ってきたの？　俺、Gチューニングで弾いたことないぞ」
「へっ？」ゆっくりと美里が振り向く。
「いや、だから……弾いたことない」
「う、ううう、うそぉ！　ちょ、ちょっとどうするのさ。あと、ああ、5分しかないよっっ！」

水が一瞬で沸騰したのかと思うほどに、美里は勢いよく混乱し始めた。こういうところは、結構可愛い。小動物を弄っているような気分だ。
「あー、まぁ。なんとかなるだろ」
「ちょっと、ダメだって。お客さん満員だよっ！　うん、新しいの持ってくる」
「大丈夫だって。パフォーマンスの一種と考えれば、お客さんも許してくれるよ」へらへらしながら言ってみる。
「そんなわけないでしょ！　ちゃんとお金払ってくれてるんだから！　あんたはほんとに、そこら辺ルーズなんだからっっ！」
なにかに弾かれたかのように、美里は走り出した。チェック柄のスカートがふわりと舞い上がる。もう十分かな。
「あのー、美里さん。ちょっといいかい？」
「なによ！　早くしないと間に合わなくなるわよっ！」
「その、なんだ。あのさ……」
俺はオープンGチューニングのテレキャスターで、『ブラウン・シュガー』のイントロを弾いた。
適当なところまで弾いて顔を上げると、美里は扉の前であんぐり口を開けて固まっていた。
「なっ、なんで……」
「いや、だからさ、さっきのは嘘。ちゃんと弾けるよ。ほんと大丈夫」
目を細めながら言うと、美里の頬がかぁと赤く染まった。
「……そ、そう。嘘。ふぅん」それから顔を俯かせ、肩をぶるぶると振るわせる。「そう、嘘か。嘘だったのか。そっかぁ、あっははは」
美里は笑い出した。俺もつられて笑った。
「この、バカヤロ――――っっ！」
ぱぁーん、という痛烈な音が楽屋に響いた。

ステージ脇から客席のほうをこっそり覗くと、溢れんばかりの人が我を忘れて踊り狂っていた。
美里のいったとおり満員だ。
先鋭的なギターリフに体を振るわせ、ドラムとベースが刻むリズムに心臓の鼓動を重ねている。大気を切り裂くようなヴォーカルのシャウトに、人の波が唸りを上げる。会場のボルテージは最高潮。俺たちの出番もあと少しだ。
俺が臨時のギタリストを引き受けている、おっさんの率いる４人組のバンドは、意外なことにとても人気がある。それはおっさんの信用からくるものなのか、単にバンドの実力なのかは俺にはよくわからない。とにかく、平日の部活があっている時間帯に、一つの箱を満員にするくらいの集客力はあるわけだ。
「うー、まだひりひりする」
左手で美里にはたかれた頬を擦りながら、丁度良いストラップの位置を探った。そうしていると、おっさんが寄ってきて俺に耳打ちした。
「いやぁ、つかさ。お前のおかげで助かったぞ。あれで煙草のことを忘れてくれたかもしれんからな。お小遣いを５００円あげよう」
「ビンタ一回５００円ですか。美里の、ということを加味して３０００円は欲しいところですね」
「がっはっは！　３０００円なら俺がぶたれにいくわ！」
なんだよそれ。
みんな、ありがとぉ――――ッ！
絶叫が聞こえた。前のバンドの演奏が終わったようだ。胸の奥底で、なにかが騒ぎはじめる。全身の神経がぶるぶる震える。これが緊張というやつだろうか。ライブが始まる前にはいつも感じる。こ

れはこれで、嫌いじゃない。
弾ける歓声と熱気。それとは逆に、俺たちの間に流れる空気は真空管のように澄んでいた。
あたりを見回すと、美里とばっちり目があった。ふんっ、と鼻を鳴らしてそっぽを向かれた。被害者は俺のような気がするんだけど……。
「なにか喧嘩でもしたんですか？」
丸めがねと目元の小さなしわが印象的な、優しげな顔にぶつかる。ベースの柏木さんだ。薄い青のジーンズに、焦げ茶色の趣味の良い薄いTシャツを着て、ヘフナーのベースを抱えている。
「まぁ、いつもの感じですかね。沸点を見極められなかったんですよ」
「あはは。なるほど。女の子は難しいですからね。僕も娘には手を焼いていますよ」
俺はまったくです、と同意して笑った。
息を大きく吸い込み、ステージを見る。
「さぁ、行くぞ」
おっさんが合図を送った。

ライブは大盛況だった。特に失敗もなく――後半のおっさんはゾンビになっていたが――熱狂のうちに幕を下ろした。
俺は楽屋で対バンしてもらったメンバーに軽く挨拶して、すぐ家に帰った。
帰り際、美里に明日からの急なヘルプは断ってもらえるように頼んだ。美里は右手の人差し指を口元にあて、理由を訊いてきた。
「う～ん。猫の飼い主捜し？」
「はぁ？　どういうことよ？」美里は怪訝そうな顔をする。
俺は屋上でのことを話そうか迷ったが、めんどくさいことになりそうだったのでやめた。

「まっ、そういうことだよ」
「……ふぅん。まぁ、ゆきちゃんのこともあるし、予約分の仕事はやってくれるんなら、大丈夫じゃないかな。うん、おとうさんには話しとく」
「ああ、さんきゅ」
「きにすんな。あっ、あんたのギターだけど、明日には出来てると思うから、暇なときに取りに来てよ」
俺は明日取りに来るよ、と言って美里のいるカウンターに背を向けた。

3章

翌日の放課後。授業が終わると、俺はすぐに屋上へ足を向けた。
屋上の扉をゆっくり開けると、柔らかくなった日差しがぱっと目に飛び込んでくる。心地良い風が吹いていた。
給水塔の脇にいくと、ルークが床に寝そべって気持ちよさそうに日向ぼっこしていた。俺は日陰になっているルークの横に腰を降ろし、いつものようにあぐらを掻いて給水塔に寄りかかる。暇を潰そうと思って手を伸ばす。だけど俺の手は空を切るばかりだった。
「あっ、そういえばギターないんだった」
一ノ瀬さんがくるまでなにしてようか。ギターがなければ、俺にできることなんてほとんどない。音楽を聴くか、ルークと戯れるかくらいだろう。
心配なんて何にも無いといった感じに寝転がっているルークの脇腹を、ちょんと小突いてみる。するとルークは仰向けにごろんと転がり、ぐーっと伸びをして、もう満腹だ、といった感じの顔をした。可愛らしいというよりは、むしろむかついてくるような顔だ。腹立たしくなって、しばらくルークを弄って遊んでいた。
一ノ瀬さんが屋上にやってきたのは、十分くらいたってからだった。
「ごめんね。遅くなっちゃって」
「いや、俺も来たばっかりだよ。それよりも、その紙は？」
一ノ瀬さんは紙の束を抱えていた。たぶん、百枚くらいはあると思う。
「あ、これ？　えへへ、知りたい？」
「ううん。別に」俺はできるだけ素っ気なく答えた。
「えぇ～～っ！」一ノ瀬さんは不満そうな声を上げ、すねたようにほっぺたをぷっくりと膨らませる。「あのね、朝倉くん。そこは目を輝かせて、手をぶんぶん振って、興奮気味に知りたい！　ってい

うところだと思うの」
一ノ瀬さんのくるっとした瞳の表面には、今いったことをやってほしい、と書かれていた。
「あのね、一ノ瀬さん。そういうのは俺のキャラじゃないと思うんだ。ほら、ハードボイルドとかクールっていうか……」
「うん。それで？」
一ノ瀬さんは目をキラキラさせながら、俺の顔をのぞき込んでくる。俺は呆れて、小さく息を吐いた。しょうがない。
「ねぇ一之瀬さん、その百枚くらいある紙は一体何なの？　すげぇ興奮するんだけど！」なんか、紙に欲情してるみたいだな。
「ふっふっふ、知りたいかね？　仕方ないなぁ～、朝倉くんは。今回だけだよ？」楽しそうだ。
得意げに鼻をふふんと鳴らしながら、一ノ瀬さんは抱えている紙の束から上の一枚を手に取り、見せつけるようにして俺に渡した。
それはルークの似顔絵だった。しかもめちゃくちゃ上手い。クラスに一人はいる絵が上手いではなく、美術か芸術か、という感じの絵だった。
俺はその絵とルークとを視界に入れ、交互に見渡した。やっぱり上手い。それも似顔絵としての描き方で描かれている。
いつだったか、刑事物のドラマかドキュメンタリー番組だったかでくたびれたスーツを着たおっさんの刑事が言っていた思うのだけど、似顔絵というのは特徴的な部分をさらに強調して描くものらしい。たとえば、顎がしゃくれている人を描くときは、本物よりも二十％増しで顎を鋭角的に描くらしい。
つまり一ノ瀬さんの持ってきた似顔絵には、ルークのまるまる太った感じと、そしてなにより、あのムカツク顔が２０％増しで描かれていた。
「これ、一ノ瀬さんが描いたの？　すげぇ上手いんだけど」
「ううん。私じゃなくて、トーコに描いてもらったの」
トーコ？　誰だそれ。

「朝倉くん、ほんとに知らないの？　学校で知らない人は、たぶんいないと思うんだけど」
「いいや。ここに知らないやつがいるよ」
小さな溜息が聞こえた。
「なんか、わたしのこと覚えててくれたのが奇跡みたい。雨宮遠子。朝倉くんのクラスメイトだよ？」
「雨宮遠子？」聞き覚えがあった。「ああ、なんだ生徒会長か。あの狐みたいな感じの」
「う～ん、狐かぁ。うん、結構近いと思う。でもね、あれはどっちかというと、ただのセクハラ親父だよ」
「セクハラ？」すごく気になる。
「あ、いや、なんでもないのっ！　それよりも、ルークの話だよ」
頬をかすかに染めながら、一ノ瀬さんが言った。
「セクハラは？」
「もう！　その話は終わりっ！」
今度はぴしゃっと言い放つ。俺は肩をすぼめ、
「……わかったよ、ごめん。それでその似顔絵は？」
「うん、情報収集だよ。ビラをまいて、ルークの飼い主の情報が手に入ればな～、と思って」
「情報収集ね～」
確かに似顔絵の上の方には大きな文字で「情報求む　一ノ瀬みなぎ」と書かれている。ちょっと恥ずかしい。
「まぁいいや。どっちにろ、それくらいのことしか出来ないよなぁ」
「うん、それじゃいこう。早くしないとみんな帰っちゃうよ」

結論から書くと、ビラ配りは２０分くらいした後に教師に見つかって、結局半分くらいしか捌けなかった。
生徒指導室に連行され、担任の教師から「まったく朝倉は成績も悪いのにこんな問題行動をおこしおって、次やったら停学だぞ！」

と、まるで主犯のように扱われた。解放されたのは三十分くらい説教された後で、空は良い具合にあかね色に染まっていた。
「ごめんね、わたしのせいで」
校門を出てしばらくしたところで、一ノ瀬さんが呟いた。
「大丈夫だよ。だけどまぁ、早めになんとかしないと、停学は免れなくなるね」
「うん。あっ、お詫びと言っては何だけど、奢ったげるよ」
道ばたにたたずんでいる自動販売機を、一ノ瀬さんは笑いながら指さす。その自動販売機はコカ・コーラのもので、半分くらいは塗装が剥がれ落ちそうになっていた。一ノ瀬さんは缶のファンタオレンジを買い、俺はブルーマウンテンを奢ってもらった。
「朝倉くんって、ハードボイルドとかクールな感じを目指してるって言ってたけど、ここで缶コーヒーはただのおじさんだと思うの。援助交際とか疑われるよ？」
「俺ってそんなに老けて見える？」本当ならすごいショックだ。
「う～ん。オーラがね、こう、雨が降る前のどんよりとした雲みたいというか」
なんだそれは、と思う。どんよりとした雲というと、暗いということだろうか。まぁわからなくもないかな。
一ノ瀬さんはファンタオレンジのプルタブを開けて口をつけると、言葉を探すように目を閉じた。
「だけど、話してみると意外と明るいというか――」
「雨が降り止んで暖かなお日様が顔を出して、それでいて高くて、小川の水みたいに澄み渡っている青空みたいだよね」
「……そういうことを自分で言う？　でも、ちょっと意外だよね。朝倉くんって、もっとダンゴムシみたいな人だと思ってた」
楽しそうに一ノ瀬さんが言う。俺はブルーマウンテンを開けて一口含み、ダンゴムシって凄く失礼じゃないか？　と苦笑した。
「冗談が好きなんだ。別にさ、俺に話掛けるんじゃねー、なんて思っちゃいないんだよ。たださ、良くわかんないんだよ。人との関わ

り方とか、そんなことが」
俺は自分の言葉に目を見張った。どうしてこんなことを言ってしまったのか、不思議でしょうがなかった。もしかすると、一ノ瀬さんの雰囲気に騙されたのかも知れないな、と思った。
「でもね」と俺は続けた。「コーヒーを選んだのは、ただの好みだよ？　ハードボイルド関係なく」
「ほんとに？　コーヒーってまずくない？　あれを飲んでる人は、ただ格好つけたくて飲んでるんだと思ってた」
「そういうやつもいるんだろうけどね。でもこれは美味いよ。ほら、騙されたと思って飲んでみなよ」
ブルーマウンテンを一ノ瀬さんに渡し、俺はファンタオレンジを受け取る。一ノ瀬さんは小さなその缶を両手で持ち、罠に掛かったウサギのようにゴクリとつばを飲み込む。そして意を決したかのように缶を持ち上げ、一気に喉を揺らした。俺はそういえば間接キスだな、とか考えていた。
「うぅ〜〜〜〜〜〜〜〜っ！！」口を押さえ涙目になりながら、一ノ瀬さんは俺にエメラルドマウンテンを押し返す。「朝倉くん言うことは、今後一切信用しないことにします！」
「そんなにまずかった？」
制服のポケットから白いハンドタオルを取り出し、一ノ瀬さんはしゃがみ込んで、ごしごしと口元を拭いている。
コーヒーが不味かったのか、それとも間接キスがよほどイヤだったのか、どちらなのかは俺にはわからない。
俺はファンタオレンジを一口拭くんで、一ノ瀬さんにそれを返した。コーヒーを飲んだ後だからか、甘ったるい味がした。
一ノ瀬さんは、夕食にピーマンとタマネギとピクルスを出された子供みたいに深刻そうな顔をして、すっと空を見あげた。
「なんていうか、テレビのコマーシャルの全てを否定したくなるような味がした」
よくわからなかった。

「ま、まぁ、それはたぶん、一ノ瀬さんがまだ子供なんだよ。たぶん」
俺がそう言うと、一ノ瀬さんは立ち上がってふらふらと歩き出した。俺もそれに続く。
「そういえば、ギターはどうしたの？」と一ノ瀬さんは振り返らずに言った。
「あぁ。弦に錆が出始めてたから、交換してもらってるんだ」
「交換？」
「うん。ギターの弦って、二ヶ月に一回くらいは交換しないと錆が出てきて変な音になるんだ。それで、俺はこれからギターを取りにいこうと思うんだけど……」
俺は一ノ瀬さんの一メートルくらい後を、金魚のフンみたいにして歩いた。一ノ瀬さんの後ろ姿は思ったよりもほっそりしていて、すぐに壊れてしまいそうに思えた。
あたりを見渡してみると、フランスの陶磁器のように白いカサブランカが、外周ブロックの上のほうからちょこんと覗いていた。
大通りに出たところで、一ノ瀬さんが振り向いた。髪が扇のように開いて、元の位置に戻る。手を後ろに回して、少し前屈みになりながら、一ノ瀬さんは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「いらっしゃーい！　って、なんだ司か」
羽田楽器店の自動扉をくぐると、カウンターの脇にいつものエプロンを着た美里がいた。安っぽそうな丸椅子に腰掛けて、にやにやしながら漫画を読んでいた。店内にお客さんの姿はなくて、空調機のすぅーという静かなはずの駆動音が、やけに大きく聞こえる。
「そっか、今日は金曜だもんな」
「そう。みんなあっちに行ってる」
あっちというのは、もちろんライブハウスのほうだろう。金曜日と土曜日のライブハウスというのは、次の日が休みなこともあって、

いつも以上に混み合う。さらにこの時間帯のライブは一番盛り上がる。だから客がいない。なぜ金、土のこの時間帯のライブが一番盛り上がるのかというと、この後の飲み会ででろんでろんに酔った女の子に、「明日休みだよ」という魔法のワードが使えるからだ。俺はもちろん使った事なんてない。

「それで……」と言って、美里は漫画本から顔をあげ、俺の後ろ側を指さす。「その子は……誰？」

「あぁ、えっと――」

なんて説明しようか考えていると、俺の前にすっと影が現れる。

「一ノ瀬みなぎです。朝倉くんと同じ桜花高校の二年です」

「……ふぅん。あっ、あたしは羽田美里。よろしく」

値踏みするような目で、美里は一ノ瀬さんをなめ回すように見る。それから小さく息を吐いて、

「ねぇ、つかさ。もしかして、バイトのキャンセル理由は……これ？」

おどけながら右手の小指を立てる。

「ちげーよ。ほら、昨日話しただろ。猫の飼い主捜し」

「あぁ。なんかそんなこと言ってたわね。で、それってなによ？」

「なにってお前……、猫の飼い主捜しだよ」

「はぁ？」と美里はさげすむような声を出す。

「朝倉くん。それじゃ説明にならないよ。というか、話をする気ないよね、絶対」

一ノ瀬さんが肩を突ついてくる。

「う～ん。なんか、めんどくさいことになりそうな気がするんだよね」

つーか、バカにされそう。

「いいよ。わたしが話すから」

一ノ瀬さんが美里に向き直り、なぜか真面目な顔をする。怪談話をするときのような顔だ。

「実はわたしたち、将来を誓い合った仲なんです」

あん。なんだって？　将来を？
「ある日の学校の屋上でこれからのことを互いに話し合って、一緒に大事なものを見つけようね、って。だからわたし、彼女ではなくですね――」
いや、確かに学校の屋上でルークのことを話し合って、飼い主見つけようね。ってことにはなったけど……。
「違うよね！　それおかしいよね！　どうしてそんな紛らわしいことを言う！？　確かに間違っちゃいないけどさ、絶対違う意味にとられるよね！？」
「もう。ただのアメリカンジョークだよ？」
一ノ瀬さんが盛大に笑いはじめる。
「……いや。俺が突っ込まなかったら、そのまま続けるつもりだったよね？」
「あ、あのさ。お邪魔のようなら、席を外すけど……」
美里が遠慮がちに訊ねてくる。
「まて。きちんと説明するからそこにいてくれ」
「うんうん。はじめからそうすれば良かったんだよ」腕組みして、一ノ瀬さんはぶんぶん首を縦に振る。
「まぁ……、そうだね……」
言い返す気力なんかどこにもなかった。ひょっとすると俺は、とんでもない子の手伝いをするハメになったんじゃないのか、と考えていた。
「まぁ、なんだ、説明するとだな。ある日の学校の屋上でこれからのことを――」
「それ、さっきと同じじゃない」
美里に呆れられた。

猫の飼い主捜しのことは、脇道にそれながらも、なんとか説明することが出来た。人になにかを伝えるのに、これほど苦労したこと

はなかった。
俺は近くのカウンター近くの椅子に腰を降ろして、うなだれていた。
「美里、俺のギターは？」
美里は相変わらず、あの安っぽい丸椅子に座っていて、一ノ瀬さんとなにやら話し込んでいた。
「ん？　あぁ、あそこ」
めんどくさそうに、美里は店の奥のほうを右手で指さす。目を泳がせると、そこにはアンプやらシールドやらが無造作に沢山転がっていて、俺のマーティンの黒いハードケースもそこにあった。どうやら作業場らしかった。その更に奥には、
「あ、ピアノ」一ノ瀬さんが呟く。
スポットライトがあたったように開けた作業場の奥のスペースには、ぽつりとピアノが置いてあった。ヤマハのグランドピアノ。宝石のように光る漆黒と、何者も寄せ付けないような風格。その薄く埃を被ったグランドピアノは、俺が羽田楽器店に顔を出しはじめたときにはもうすでにそこに存在していて、モンブランの頂上には栗が置いてあるのと同じように、俺にとっては当たり前のものになっていた。
「もしかして、ピアノ……弾けるの？」美里が訊ねる。
「うん。あ、でも、小学校の頃に弾いてただけだから、今弾けるかはわからないんだけど……」
「ねぇ弾いてみる？」
「えっ、でも。こんな立派なピアノ、わたしなんかが弾いても良いのかな……」
「良いも悪いもないわよ。あたしもお父さんもピアノ弾けないし、お客さんもギタリストとドラマーばっかだし、その子も弾いて欲しいはずだからさ」
美里がなにかを込めたように言う。
だったらどうして、この店にグランドピアノなんか置いているの

か？　と、俺は思った。けど、そんなことを訊ねる気にはなれなかった。きっと、なにか、特別な理由があるんだろう。
「うん。それなら」
一ノ瀬さんの答えを聞いて、美里がゆっくりと腰を上げてピアノのほうへ歩いていく。
グランドピアノの天屋根と鍵盤蓋をゆっくりと開け、８８の綺麗な鍵盤の上に掛かっていた赤い布を、丁寧にのける。
美里は近くに置いてあったパイプ椅子を引き寄せて、腰を降ろす。背もたれを前にして、楽しそうに頬杖をつく。
「モールス・ラヴェルは弾ける？」
「パヴァーヌなら大丈夫だと思う」
「それで良い。クラシックはよくわからないから。それしか知らない。あっ、あとは、ベートーヴェンくらい？」
「あはは。高校生でラヴェルを知ってる人は、たぶんほとんどいないよ」
そう言って、一ノ瀬さんはピアノ椅子にそっと座った。そしてなにかを確認するように、適当な白鍵を人差し指でちょこんと押さえる。高い音がなった。口元がほころぶ。そんな気がした。
だけど次の瞬間には、一ノ瀬さんは白と黒のモノクロの世界に、その身を深く沈み込ませていた。
巧い。生まれたての小鳥が発する、産声のような音だった。ゆったりとしたテンポ。シャボン玉を割らないように気をつけている子供をイメージさせるような、優しい曲のように思えた。
いつの間にか、俺の隣に真剣な顔をしたおっさんがいた。曲が終わった。おっさんはいきなり俺の腕をとって、
「美里、こいつ借りるぞ。ギター弾けるやつが足りねぇんだ」
「えっ、あ――」
おっさんは美里の答えもろくに聞かず、無理矢理に俺をライブハウスに続く通路へ引きずりこむ。階段を降って楽屋の前に来たあたりで、おっさん腕を払う。

「ちょっと痛いですって。なんなんですか、いきなり」
「さっき言っただろ。ギター弾けるやつが足りないんだ」
おっさんがぶっきらぼうに答える。
「そういうことじゃなくて……、あまりにも、不自然な気がするんですけど」
おっさんは溜息をついて、エプロンのポケットからラッキーストライクを取りだし、火をつけた。
「ふぅ……。うるせぇな、仕方ねぇだろ。ギター弾けるやつがいなかったのは本当なんだよ。しょうがねぇから美里に弾いてもらおうと思ってな。それで店に上がるとよ、えれぇ可愛い子が渚のピアノを弾いてやがる。少し聴き入ってたんだがな……、ちょっと頭ん真ん中が混乱してきて、どうしようもなくなっちまったんだ」
渚、というのはたしか、美里の母親の名前だ。中学の時に聞いた覚えがある。小さい頃に死んでしまった、と。詳しくは知らない。
「美里は平気そうにしてるからな、俺も顔に出さないようにしてたんだ。だけどな……」
「はぁ……、もういいですよ。わかりました。特急料金は通常価格の3割増しですからね」
イヤな匂いがする煙を吐きながら、おっさんが言う。
「ちっ、調子に乗りやがって。このクソガキが。今、そこの中で準備してるからよ、とっとと挨拶にいきやがれ」
俺は笑いながら、楽屋の扉を開けた。
結局、いつまでも引きずっているのは、男のほうなのだ。

3章続き

3割増しでは足りない、そう思った。俺の好みは昔ながらの英国ロックで、そうじゃないとすればアメリカポップスだ。ヘヴィメタルというのは専門外だ。そして何より、ヴィジュアル系とは地平線の果てまで行っても縁がないと思っていた。

「ヒャ――っ、ハ――――――――ッ！　へいへいへい、みんなノッてるか――いッ！？　俺は最高にハイだぜ――――ッ！　なんたって、俺たちに新しい仲間が加わったんだからな！」

観客の波が狂ったような歓声をあげる。

「ギターのツカサだ。今日はアツシが風邪をひいちまってな。このライブの限定だけど、俺たちの熱いビートを天まで届けてくれる、素敵なギタリストだ！」

ボーカルのリオさんが大げさな身振り手振りで俺を紹介すると、無数の強烈な視線が弾丸のようにぶつかってくる。

俺はほんの20分前のことを思い出す。

楽屋に入っていくと、けばけばしい化粧の匂いが鼻を突いた。ギターのヘルプだということを説明すると、新卒のサラリーマンが着ているようなぶかぶかのスーツを身につけた、真面目そうな人が出てきた。リオさんだ。嘘じゃない。

なんの曲を演奏するのか聞こうと思ったら、とりあえず、とリオさんが言って、パイプ椅子に座らせられた。

そして俺は、デーモン木暮ばりのわけのわからない厚化粧をさせられてしまった。

正直、気後れしている。曲のほうはなんとかなっているけれど、この革命前夜のようなよくわからない雰囲気に、俺の思考回路は悲鳴を上げていた。

どうしようか……。

なんとか逃げ場を探そうと、観客席のほう見渡してみる。入り口

の近くに、一ノ瀬さんと美里がいて、
——爆笑していた。
体をくの字に曲げてお腹を抱え、こっちにまで笑い声が聞こえてきそうだ。
俺はもう、どうにでもなれ、と思った。
「おい、てめぇーら！」キーンッという音がステージに響き渡る。
「もっと盛りあがらねーと、ゲッ、ゲ、ゲヘナに突き落とすぞコノヤローッ！」
わーっと波が唸る。ヒューヒューという指笛が聞こえる。俺の顔をたぶん、真っ赤になっている。だから、このときばかりは、顔を埋め尽くしているヘンテコな厚化粧に、少しだけ感謝した。

シャワー室で化粧を洗い流して楽屋へ挨拶に行くと、リオさんが興奮したように詰め寄ってきた。なんでも、バンド史上最高に盛り上がったライブらしく、専属のギタリストを首にして俺をメンバーに加えよう、なんて話題が出ていたらしい。俺はもちろん、丁重にその話を断った。
今まで体験したことのない種類のライブだったし、後半は俺も楽しんでいたのだけど、あの化粧は勘弁して欲しかった。
「でも、諦めてはいないから。考えておいてくれよ」
リオさんは最後にこう言った。俺は苦笑して、楽屋を出た。

急ぎ足でお店のほうへ行くと、一ノ瀬さんと美里がおかしそうに笑い合っていた。
「あ、来た来た。やぁ、デーモン・ツカサくん」
「マジでやめてくれ。俺のキャラが狂う」
「えー、結構格好良かったよ」笑いながら一ノ瀬さんが言う。結構、くすぐったい。
「それよりさ、もう帰らないといけないんじゃない。暗くなってる

よね？」
携帯で時間を確認する。午後８時。当然、日は暮れているはずだ。
「うん、そうだね。早く帰らないと、おばさんに怒られちゃう。それじゃね、美里ちゃん、朝倉くん」
「ピアノ弾きたくなったらいつでもおいでよ」
美里が一ノ瀬さんの背中に声を掛ける。
くるっとした瞳を嬉しそうに細めて笑い、一ノ瀬さんは小走りで羽田楽器店の自動ドアをくぐった。
一ノ瀬さんの後ろ姿を眺めていると、美里が俺の足を蹴ってきた。
「……それで、あんたはなにやってんのよ」
「なにって？」なんのことだ。
「一緒に帰ってやりなさいよ。あんたそんなこともわかんないの？」
「いや、だって、俺のマーティンは？」
「うっさい！　そんなの、明日取りに来れば良いでしょっっ！　ほらさっさと追いかける！」
「わかった、わかったから蹴るな！　ズボン汚れるだろこの野郎！」
美里に尻を蹴り上げられ、仕方なく、俺は一ノ瀬さんの後を追った。
外に出ると、群青色の空が世界を覆い尽くしていて、車のヘッドライトやコンビニの看板の光が、やけに眩しく感じた。春の心地良い夜風が靡いていた。
一ノ瀬さんの姿はすぐに見つけることが出来た。随分と華奢な後ろ姿。走って近づき、後ろから声を掛ける。
「あれ、朝倉くん。あ、もしかして、家まで送ってくれるの？」
「まぁ、女の子一人で帰るのは危ないからね」
美里に急かされたからだなんて、とてもじゃないけど言い出せない。
「ほんとにぃ？　美里ちゃんに言われたからじゃなくて？」
す、鋭い……。
「う、いや。そんなことは……ない、と思う」

「あ〜、その反応は嘘だよね？　大体、朝倉くんはちゃんとした気遣いが出来る人じゃないんだから、そんな嘘、すぐにばれちゃうよ？」
一ノ瀬さんがいじらしく笑う。
「そんなにできてないかな……」
「うん。たとえばね、去年の文化祭で何でも良いから楽器弾ける人〜、って訊いてたのに、朝倉くんは手を上げなかった。他には、体育祭でリレーの選手決めるときに、足すんごーく早いのに手を上げなかった。極めつけは今、わたしに車道側を歩かせていること」
「あっ、う、ごめん」
俺はさりげなく、車道側に移動する。一ノ瀬さんはにやにや笑っていた。
「でもさ、今のはわかるんだけど、文化祭とか体育祭は関係ないんじゃ……」
「ぶぅ〜〜、高校卒業して、もっと張り切っておけば良かった〜、って後悔しても遅いんだからね？　朝倉くんはもっとサービスしないと」
「サービス？」
「そう、サービス。もっと自分を見せてくれたって良いんじゃないの？　普段はクールなあの人が、ライブの時は熱いメタルな魂を炸裂させる！　みたいな」
俺は苦笑いをする。
「ほんとにやめてほしい。あれは今日だけだからね。普段はビートルズとかクイーンとかエリック・クラプトンとか、そういう感じの曲しか弾いてないからね」
「……ふぅん」一ノ瀬さんはなにか思い出そうとするように、目をつむって、それからゆっくりと開ける。「でもね、ほんとに上手だった。弾けるだけって言ってくせに。朝倉くんの言うことは、もう絶対の絶対に信用しない」
「そんなことないよ。それを言うなら、一ノ瀬さんだって、ピアノ

凄く巧かった」
「ほんとに！？」
「うん。ほんとだよ」
「ほんとのほんと？」
「ほんとだって。嘘じゃない」
「う～ん、まぁ良いでしょう。信用してあげます」と一ノ瀬は言った。「わたしね、小学校の頃までピアノ習ってたの。コンクールとかにも出て、賞も沢山もらってたんだよ。けどね、それからいろいろあって、結局、ピアノ辞めちゃったの。だから、今日は久しぶりに弾けて、本当に嬉しかった」
一ノ瀬さんはどこか遠くを見つめていた。視線の先を追ってみたけど、俺には新宿の高層ビル群の小さなライトしか見えなかった。
しばらくなにも言えずにいると、暴走したように走る黒いタクシーが、後ろから迫って来た。サイドミラーが鼻先を掠める。
「危ないなぁ～」俺に変わって、一ノ瀬さんが悪態をつく。「変わってもらってて良かった」
「俺の心配じゃないの！？」
「あっはは。朝倉くんって、意外としぶとい人だと思うの。でも、そうだね。怪我がなくて良かった」
面と向かって言われたせいか、俺は気恥ずかしくなった。ぷいっと目を逸らす。
気がつけば随分と歩いていたみたいだった。
「朝倉くんって、南町のほうだよね？」
「よく知ってるね」
「連絡簿に載ってるよ。わたしはこっちだから、もう送らなくていいよ。それじゃ、また来週」
カツカツというローファの打ち鳴らす音が大きく聞こえる。三歩くらい駆けたところで、一ノ瀬さんは立ち止まった。それから振り返って、大きく手を振った。
「ばいばーい」

周りを気にしつつ、俺は小さく手を振り返した。
一ノ瀬さんは満足そうに微笑んで、緩やかな坂道を駆け足で降っていった。俺は一ノ瀬さんの姿が見えなくなるまで、ぼんやりと立ち尽くしていた。
翌週の月曜日、一ノ瀬さんは屋上に姿を見せなかった。

土曜日、俺は羽田楽器店にギターをとりに行くついでに学校の屋上へ足を運び、ルークの様子を覗いた。
春の暖かな日差しが空から降りそそいでいて、南校舎の屋上は、干したたての布団のように気持ちよかった。
あの小太りで図々しい猫は、影の差した床にぐてーっと寝転がっていて、左足には新品の包帯が巻かれていた。小皿の上にはキャットフードがたんまり積まれている。
なんだかむかついてきて、ルークの腹に軽くけりを入れてみた。ルークは「にゃ〜」と何事もなかったかのように一鳴きして、ごろんと寝返りを打った。幸せそうな顔をしている。
こいつの名前を「ブー」あたりに改名するべきだと思った。

日曜日はお昼から雨が降った。強烈な雨で、台風でも発生したんじゃないかと思った。
だから学校の屋上へは行かず、ずっと家にこもってゆきの相手をしていた。一緒にゲームをしたり、あるいはギターを弾いたり、急いで取り入れた洗濯物にアイロンを掛けてみたりだ。
四月にしては随分と強烈だった雨は、テレビに向かってじゃんけんする頃にはすっかり降り止んでいた。

4章

授業が終わってすぐに屋上へ向かう。もはや日課以外のなにものでもない。

廊下を歩いていると、教室で談笑する生徒の声がしみ出して耳に聞こえた。

屋上の扉を開ける。

昨日まで雨が降っていたことが嘘のように、高く澄んだ青空が視界の隅々にまで広がっていた。

ルークの寝そべっている給水塔の脇に腰を降ろし、担いできたギターケースを床に降ろす。

一ノ瀬さんの階段を登る音は、三十分たっても聞こえてこなかった。

脳天気に『ホワット・エヴァー』を弾いていた指も止まり、さすがに、おかしいと思い始めた。西の空はあかね色に焼けはじめ、夕暮れの様相が強くなっていた。

ルークもどうやら腹が減ってきたようで、いつもならキャットフードが高々と積まれているはずの小皿を、前足でちょこちょこ引っ掻いている。エサがないことを確認しているようだ。

ルークが足を引きづりながら、俺の前に来る。目の前で恋人に死なれたかのように、悲しそうに瞳を潤ませて、「にゃ〜にゃ〜」とエサを要求してくる。

「はぁ……」

溜息をつく。俺は考えた末、少し校内を探してみることにした。

もしかしたら、委員会かなんかの仕事かもしれないし、教師に呼び止められたのかも知れない。

はじめに、二年三組の教室へ行ってみた。一ノ瀬さんのクラスだ。

閉まりきった廊下の窓から人影を探してみた。でも、揺れ動いているものはなにもなくて、人がいる気配は微塵もない。

仕方がないので、職員室に向かう。
職員室は北校舎で二組と一組の前を通って渡り廊下へでなければいけない。俺はまた歩き出した。窓の柵と自分の影がすっと伸びていた。
１組の前を通ったとき中に人がいるのが見えた。廊下側の前から二番目の窓が開いていて、廊下から横目に中を窺った。
緑の連絡ボードの前に、女の子がいた。
赤茶けた長い髪。毛先だけが思い思いにばらけていて、まるで桜の花びらが散っているように思えた。女の子が振り向いて、目があった。
ツンッとつり上がった大きな瞳。不機嫌そうに閉ざした小さな唇。
桜花高校の生徒会長で、俺のクラスメイト。
――雨宮遠子だ。

「ねぇ朝倉くん。少しだけ待ってもらえる？　あと、１０分くらいで終わるから」
目が合うなり、雨宮はそう言った。俺の表情からなにを読み取ったのかは、よくわからなかった。
仕方なく、俺は教室に入って自分の席に腰を降ろした。ベランダの窓からオレンジ色の光が差し込んでいて、教室の中はまるで紅茶をこぼしたような感じになっていた。
雨宮は連絡ボードに止められているプリントの類を、新しいものに張り替えているようだった。
金色の丸い押しピンを無理矢理抜き取っている。
「手伝おうか？」
「いいわ。こんな仕事、人数が増えたところで変わりはしない」雨宮は素っ気なく答えた。

「ふむ。それもそうだな」
「でも――」作業している手を止めて、雨宮は俺のほうをちらりと見やる。「ＢＧＭくらいは、あっても良いと思う」
「……なるほど」
肩に担いでいたギターケースを床に置き、マーティンを取り出して構える。適当なフレーズを弾いて、音を確認した。
「リクエストは？」
「ジミヘンのヴードゥー・チャイルド」
ハードロックかよ！　しかもジミヘンって、エレキならともかく難易度高すぎだ！
「……お前、アコギって知ってるか？」
「知ってるわよ。それくらい」
「そっか。いや、なんだ、アコギじゃ無理だ」
「……そう。なら、なんでもいい」
「……そっか」
俺は頭を抱えた。こいつはなにを弾いたら喜ぶんだろうか？　まったくわからない。なら、何でもいいだろう。
俺はなんとなく、マイケル・ジャクソンの『ユー・アー・ノット・アローン』を弾いた。

「先に言っておくけど。私、あんたのこと大嫌いだから」
連絡ボードのプリントを全て張り替えると、雨宮は振り向いて、目を細めながら試すように言った。
「……は？」
「あんたの顔も髪形も声もギター弾けるところもクールにしてるとこも全部含めて、大嫌いだから」
「俺、雨宮になんかしたっけ？」まともに話すのは、これがはじめてのはずだけど。

「いいや。別にあなたからはなにもされてない。あと」雨宮は顔を背けて、静かに呟く。「名字はやめて。嫌いなの。遠子。出来ればカタカナっぽくトーコ。みんなそうしてるから」
「はぁ……。んじゃ、トーコ。一ノ瀬さんがどこにいるか知ってるか？　お前らって友達なんだろ？」
「友達って、あの娘が言ったの？」
トーコは怪訝そうな顔をした。なんだろう。
「いや、言ってはいないけど、そんな気がしたから。違うのか？」
「違う。みなぎは、……私の恋人よ」
「……あん？」
「聞こえなかった？　みなぎは、私の恋人」
恋人って、彼氏彼女の関係のことだよな。
「……それはアメリカンジョークかなんかか？　そういうのって、俺の知らないところではやってたりするのか？」
「いいえ。私は冗談が嫌い。だから言葉通りの意味よ。アイ・ラブ・ミナギ」
俺は思わずこめかみを押さえた。そういうことなのか？　セクハラ親父とか言ってたし。まさか生徒会長がこんなやつだったとは。
「……いや、別に個人の趣向に対してとやかく言うつもりはないし、別に否定もしないけどさ、一応言っておくと、一ノ瀬さんは、女の子だぞ？」
「そうね。でも、それがなんだというの？　くだらない価値観だわ。美しいものは美しい。可愛いものは可愛い。汚いやつは死ねばいい。それで良いじゃない。あなたの弾くロックというやつも、そういうことじゃあないの？」
腕を組み、トーコは教室の壁に背中をあずける。それから自嘲気味に笑い、低い天井を見上げた。
「中学校の入学式のことよ。私は新入生代表の挨拶をしたの。くだらない挨拶よ。規則を守りますだとか、友達をたくさん作りますだとか。ほんと、反吐が出る。それが終わってね、私は席に戻るの。

そしたら、隣にいた可愛い子がね、くるっとした目をキラキラさせて言うの。『かっこよかったよ！』とか『代表ってすごいね！　頭良いんだね！』って。親が議員だから無理やりやらされただけなのにね」
「そりゃあ、純粋ないい子だな。で、それが一之瀬さんなわけだ」
トーコは肯いた。
「入学式が終わると新入生だけ退場になるじゃない？　体育館を出て渡り廊下までいったところで、後ろにいるみなぎのことが少し気になって、振り向いてみたの。そしたらあの子、まるでタイムスリップして来たみたいにキョロキョロしてるの。『すごいねー』とか『あれなんだろう』とか、こう、危なっかしい感じにね」
うわぁ、なんか、簡単に想像できるな。
「まぁ、わくわくするわよね、ふつう。それで、ちょっとした段差に躓いたの。『きゃ！』って可愛い声を上げて、顔からズガーンとね。スカートがひらひら舞い上がって、思いっきりパンツが見えたの。淡い水色の縞々パンツ。私は、彼女に恋をしたの」
「まてや！　悪い、意味がわからない」
本当にわからなかった。良い感じの友情話かと思ったら、なんだ。パンツ？　意味がわからない。
額に手を当てて考えてみた。するとトーコはバカにしたような目で俺を侮蔑し、西洋人のようにわざとらしく肩をすぼめた。
「別に理解しなくたっていいわ」
「……まぁ、そうだな。どうでもいいことだな。で、話は戻るけど、一ノ瀬さんはどこにいるんだ？　まさか監禁しているわけじゃないんだろ？」
「……昨日、雨が降ったじゃない。お昼頃から。みなぎはね、あなた達のかくまってる猫にエサをあげようとして、天気予報も見ずに家を飛び出したらしいの」
そういえば凄い雨だった。
「まさか、雨に降られて風邪ひいたとか？」

「あの娘、結構そそっかしいから」
トーコは笑いながら肯定した。まるで自分の子供の事を言うようだった。
「まぁ、なんかわかる気がするな。そうか風邪か。なら仕方ないな。うん。ありがとよ、教えてくれて」
結局のところ、入れ違いというかそんな感じだった。今度会ったときに、連絡先くらいは訊いておくか。
「んじゃ、俺もこれで。今度、ピーチジュースくらいなら奢ってやるよ」
俺はマーティンをケースになおして、腰を浮かした。
「どこ行くの？」
「どこって、そりゃ帰るんだよ。一ノ瀬さんがいないのなら、別にやることないしな」
「それは、ダメ」
「はぁ？」
俺はなんだかめんどくさくなった。なにがダメだというのか、皆目見当もつかなかった。
トーコは口元を緩ませ、まるで試すような目つきで、俺の瞳をのぞき込んできた。少し、どきっとする。
「ねぇ朝倉くん。どうして私が、大っ嫌いなはずのあなたをわざわざ呼び止めたと思う？　それもくだらない身の上話までして」
「さ、さぁ？」
「あなたは、私の、荷物持ちをするの」
「……はぁ？」
話が見えなかった。トーコは小さく息を吐いた。
「私ね、最近みなぎと話せてないの。というかね、あの娘、私を避けて気がするの。たぶん。だからこの前、似顔絵描いってって言われたときは、もう、涙がちょちょぎれそうなくらい嬉しかったの。あぁ、みなぎから話掛けてくれた！　って。わかるでしょ、私の気持ち」

「ま、まぁ、多少は」
「昨日もね、メールが来たときは嬉しさの余り、ベッドの上でピョンピョン飛び跳ねて遊んじゃったくらいなの。でもね、メールを開いてみると、『風邪ひいちゃって、明日学校にいけないので、よかったら朝倉くんに伝えておいてください』だって。私はベッドからすとんと転げ落ちたわ。この間から、朝倉くん、朝倉くん、朝倉くんって。それで考えてみたの。はじめは朝倉司をどうやって排除するかを考えたわ。無理矢理退学に追い込むか、毒を盛ってやるか」
こいつ、ほんとに危ないやつだな。
「でもね、どんな方法を使っても、みなぎが悲しむんじゃないかって、思うようになったの。だから、とりあえず停戦協定よ。私はあなたをダシにしてみなぎとお話しするの。その間、あなたのことは見逃してあげる。そうね、同盟みたいなものかしら。どう？　悪くない条件でしょ」
「悪いもなにも、俺にはなんのメリットもないように思うんだけど」
トーコはまた小さく息を吐いて、壁にもたれかかった。
「もちろん、タダでとは言わない。そうね。あの猫のことは、屋上にいる間は黙っておいてあげるし、協力もするわ。なにか困ったことがあれば、少しは助けてあげる。数学の点数が五点足りなくて補習受けないといけないとか、それくらいならなんとかしてあげる」
「まて、どうしてお前がそのことを知ってる！？」
「あんたの点数を覗き見るくらいは、簡単に出来るわ」トーコはふんっと鼻を鳴らして、つかつかと歩み寄ってきた。「どう？　生徒会長の出す条件としては、随分良いものだと思うわよ」
「……どうせ、断っても無駄なんだろ」
こういう奴らは、手に入れたいものがあるのなら、手段を選ぶことはしない。俺は嘆息した。
トーコはにっこりと微笑んだ。
「雨宮遠子よ。呼ぶときは、下の名前をカタカナっぽくトーコ」
手がさしのべられた。俺はその手を握った。

「よろしく」
「……朝倉司だ。呼ぶときは別に何でもいいけど、そうだな、名前のほうがしっくりくる」
あるいはこれが、物語の始りでも良かったのかもしれない。
「そう。それじゃ、ツカサくん。日が暮れちゃう前に行きましょうか」
「行くってどこに？」
「決まってるじゃない」
トーコは俺の腕を取って歩き出した。そして呟く。
「みなぎの家よ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9936w/

未定、ていうか決めてない。

2011年10月9日03時28分発行